増上寺徳川家霊廟の風景（13）

―海を渡った燈籠たち（下）―

いまでも行ってみれば、眼のあたり分かる通り、幕末から維新当時にかけて増上寺の境内や数ある徳川霊廟の境内は、匡賊に類した武士や贋武士のために、惨々な掠奪を蒙っている。諸侯が寄進した青銅の灯篭を足から持って行ったのもあり、宝珠を片っ端から盗み去ったのもある。甚だしいのになると、銅で葺いた内塀の屋根を、長々と剥ぎ去ったのさえある。灯篭を運び去ったのは幕府の大筒を鋳る原料にするのだと豪語したと言うし、銅の屋根を剥ぎ去ったのは、尊王方の軍費に資するのだ、と台詞を残して逃げたと言うが、これを後になって調べてみると、それは悉く幕府に捧げたのでもなく、尊王に資したものでなかった。それは当時薄禄に食うに困ったご家人や浪人が、騒乱のどさくさ紛れに寺内へ忍び込んで手近なものを担ぎ出し、古物屋へ売り飛ばしたのや、小盗の類が贋武士となってやってきたものであると分かった。

写真１　ギメ東洋美術館の銅燈籠

佐藤垢石『増上寺物語』

佐藤垢石(1888 ～ 1956)は、新聞記者を経てエッセイスト、釣りジャーナリストとして戦前、戦後活躍した人である。この『増上寺物語』は勿論垢石の直接の見聞では無く、増上寺別当寺の瑞蓮寺住職絲山氏からの聞き書きであるという。

維新の混乱に紛れて増上寺を始め多くの寺宝が盗難に遭い、ついで文化財としての価値も見失われてしまいました。

文化財としての価値を見出していたのはシーボルト等の博物学者、今日で言う民俗学の目的を以て資料採集を行った人達であり、次いでジャポニズムの流れを承けて一攫千金の古物収集に走った人達が居り、廃仏毀釈の流れがその動きを後押ししました。

写真1はMusée Guimet(フランス国立ギメ東洋美術館)の収蔵品を紹介した戦前の絵葉書です。絵葉書のキャプションにはPARIS.-Musée Guimet.-Les Peintures du Temple de Shiba (Japon) .-ND と有ります。増上寺からもたらされた絵画を中心にしているのでしょうが、左側の二基の銅燈籠が気になります。笠には葵の紋が見えますが、多少小振りです。ギメ東洋美術館のホームページを見ても、残念ながらこの銅燈籠を確認することは出来ませんでした。ペンシルベニア大学の西村曜子先生からは、ニューヨーク、カイカット(Kykuit)に在るロックフェラー邸に置かれている銅燈籠の写真も送って頂きました。竿に絡みつくようにして付けられている龍の姿から江戸城紅葉山霊廟に在った燈籠と思われます。記念として贈られた物、古物商を通して買い取られた物。こんな風に多くの燈籠が海を渡って行きました。

写真２　ロックフェラー邸の燈籠

1．ミラノの清揚院銅燈籠

写真３　CRESPI BONSAIの日本庭園前の銅燈籠

写真3はミラノ在住の今井めぐみ様から最初にお送り頂いた燈籠の写真です。今井様からは沢山の写真を頂きましたが、写真4はミラノの古物商に有った時の写真です。

今井様がこの燈籠に出会ったいきさつは頂いたお手紙の中に要領よく纏められていますので、お許しを頂いて掲載させて頂きます。

実は、この灯篭、古道具屋さんが、ゴミの山からkgで買ったものの中にあって、友達経由で日本人なら値打ちが分かるのではということで、わたしに買わないかと持ちかけられたものです。あまりにも大きすぎるの

で、クレスピの社長に引き取ってもらいました。

盆栽美術館の日本庭園の中に置かれていますので、灯篭も本望だと思います。一部損傷していた部分を直してあります。緑青も修復過程でお化粧されたようです。修復には1年ほどかかりました。

写真 4　古物商当時と今井様

クレスピの盆栽社（CRESPI BONSAI）はミラノのパラヴィアーゴ(Parabiago)という町にある盆栽販売店ですが、販売店と言うよりは日本から盆栽を仕入れ、育てヨーロッパ中に盆栽の魅力を拡め伝えている文化センターの様な会社です。ルイージ・クレスピ氏が創業し、今では日本庭園を持ち盆栽博物館や盆栽大学を開催しています。この日本庭園に置かれているのが清揚院の銅燈籠二基です。

貴重な資料ですので写真5～8に銘文の写真を載せておきます。銘文は左のようになります。

写真 5 銅燈籠上竿刻銘

写真 6 銅燈籠上竿刻銘

奉獻
銅燈籠　兩基
武州増上寺

寶永七年庚寅
九月十四日

写真 7　銅燈籠下竿刻銘

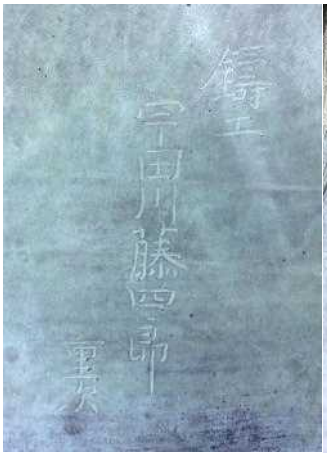

写真 8　銅燈籠下竿刻銘

加賀能登越中三國主
従三位菅原朝臣綱紀

鑄工
宇田川藤四郎
重次

銘文に見る限り「清揚院」を直接に示す刻銘はありません。しかし情報を頂いた時に、既に今井様が推測されていた様に「笠の葵紋」「増上寺」「銘に刻まれた奉献の年月日」、「奉献した大名の家格」から清揚院の三十三回忌に献納された銅燈籠に間違い有りません。

前回にご紹介したエルミタージュ美術館の尾張家献納の清揚院銅燈籠にも「清揚院源公霊廟前庭」という言わば場所の記述が有るだけで、将軍霊廟に献納された銅燈籠のように「清揚院殿　尊前」という対象者に対する記述になっていないことは注意して良いことと思われます。このミラノ燈籠に何故「清揚院」の名が刻まれていないかと言うことも今後考えて見る必要が有ると思います。石燈籠の方は全て「清揚院殿　尊前」と刻まれています。

次にこの燈籠が清揚院霊廟の中でどの様に、他の灯籠と共に並べられていたのかを見てみることにします。

傳通院から増上寺へ改葬された宝永二年銘の石燈籠は、狭山山不動寺、塩山の恵林寺、小川の大聖寺の三寺院に六大名計十二基が残されています。六大名がそれぞれ兩基献納していて、対の儘残っていることになります。

松平（柳沢）美濃守吉保　（側用人－大老格）

稲葉丹後守正通（正往）　（老中 1701 年－1707 年）
松平伊賀守忠栄（忠周）　（老中 1699 年－1707 年）
小笠原佐渡守長重　（老中 1697 年－1705 年）
阿部飛彈守正喬　（側用人 1705 年－1709 年）
松平右京大夫輝貞　（側用人 1694 年－1709 年）

の六名で何れも将軍側近、幕府の役職者です。
ところで前にご紹介した『鈴木修理日記』の宝永二年十月五日の記録に

十月五日　乙　未晴
一対馬守殿御渡候書付。
桂昌院様御仏殿江
弐基　大久保加賀守
是ハ自分ニ而御申付候、大サ被承合ニ可有之候、左様心得可被申候。
弐基　井上河内守
壱ツハ最善ゟ御申付候、今一ツニ候間、其方ニ而御申付候様御頼ミ。
弐基　松平伊賀守
是ハ右京大夫殿通ニ、其方へ御頼候由ニ候。
壱基　久世讃岐守
是ハ最前ゟ御頼置候由ニ候。
清揚院様御仏殿江
弐基　大久保加賀守
弐基　井上河内守
是ハ上総介方へ御頼之事候。
弐基　松平伊賀守
是ハ其方へ御頼候由ニ候、右京大夫殿通りニ御申付可有之候。
一越前守殿ゟ御手紙。
如此、大久保加賀守殿ゟ申来候故、此通御返答申遣候間、弥無手間、
加賀守殿御献上之御灯籠も御申付、銘文も御伺可有之候、書面書留メ
追而御返し可被成候、河内守殿も、弥弐基申付候様被仰聞候、大和守
殿ゟも壱基御頼候由被仰越候間、弥御申付可有之候、以上。
十月五日　曲淵越前守
鈴木修理様

と有ります。ここで久世讃岐守と有るのは久世大和守の事で、宝永元年十月九日に寺社奉行兼任した時に讃岐守となり、宝永二年十月二十一日に若年寄に進んだ後に大和守に改めています。この記録で見る限り大久保加賀守、井上河内守、松平伊賀守、松平右京大夫がそれぞれ二基、久世大和守が一基、曲淵越前守から鈴木修理を通じて燈籠を制作させて献納していることになります。

ところが現在までの所大久保加賀守、井上河内守、久世大和守の宝永二年銘の石燈籠は確認できていません。その代わり、次に記載するように、宝永七年銘のものが同じ基数で残っています。重複することを避けたものと思われます。

宝永七年の清揚院三十三回忌に合わせて何基の燈籠が寄進されたかは判っていません。『文昭院殿御実紀』には宝永七年閏八月二十六日の記事に

諸老臣より。　清揚院廟廷に香火の具を獻備す。

の記述が有るばかりです。

今残されている燈籠から推測できるのは、徳川綱重のもう一人の息子で有る松平清武が献納した物も含めて十四大名二十一基、不明一基の二十二基となります。

松平出羽守清武　従四位下侍従　兩基
松平讃岐守頼豊　従四位下左近衛権少将　兩基
松平肥後守正容　従四位下侍従左少将　兩基
土岐伊予守頼殷　従四位下　兩基
井伊掃部頭直恒　従四位下侍従　兩基
井上河内守正岑　従四位下侍従　兩基（老中 1705 年－1722 年）
大久保加賀守忠増　従四位下侍従　兩基（老中 1705 年－1713 年）
松平紀伊守信庸　従四位下侍従　兩基（京都所司代（1697 年－1714 年）
秋元但馬守喬朝（喬知）　従四位下侍従　兩基（老中 1699 年－1707 年）
土屋相模守政直　従四位下侍従　兩基（老中 1687 年－1718 年）
永井伊豆守直敬　従五位下　一基（若年寄 1704 年－1711 年）
久世大和守重之　従五位下　一基（若年寄 1705 年－1713 年）
加藤越中守明英　従五位下　一基（若年寄 1690 年－1711 年）
大久保長門守教重（教寛）　従五位下　一基（若年寄 1706 年－1723 年）

ですから先の宝永二年銘の十二基を含めて少なくとも三十四基の石燈籠が清揚院霊廟に献納されたものと思われます。エルミタージュの尾張家銅燈籠、それに今回のミラノの前田家燈籠もそれぞれ宝永七年銘ですので、三十三回

忌に合わせて霊廟内の整備がなされたことになります。

名前を列挙しただけではどの様な大名が燈籠を献納し、どの様な大名が献納しなかったかが明白になりません。そこでほぼ同時期宝永六年一月十二日に亡くなった徳川綱吉の常憲院霊廟の燈籠配置からその足し引きを見ていきたいと思います。東京国立博物館所蔵の『上野東叡山燈篭建場圖』から勅額門内の燈籠配置を示した物が図2です。

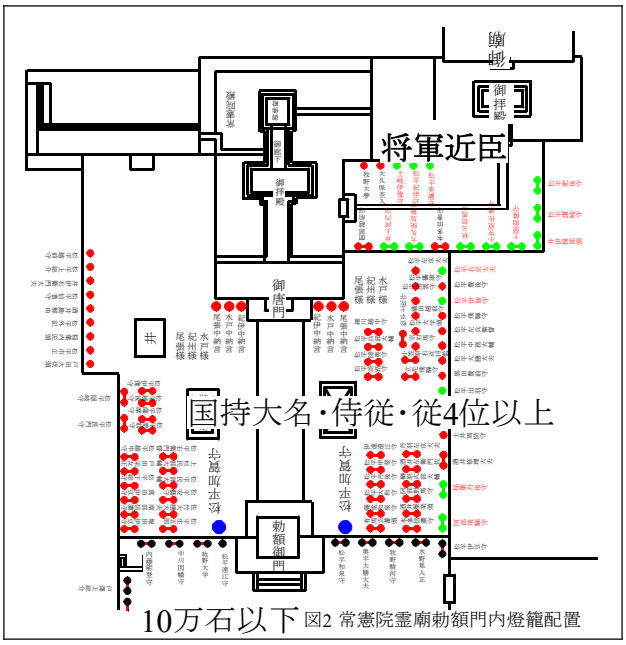

図2 常憲院霊廟勅額門内燈籠配置

勅額門の外側には石燈籠が並べられていますが、勅額門内に献納された燈籠は全て銅燈籠です。勅額門内側の左右が前田加賀守の燈籠（青色で示しています）。正面拝殿の唐門左右に御三家が二基ずつ献納しています。唐門前に燈籠を献納しているのは、上杉、伊達、細川等の国持大名を初め十万石以上の大名、従四位以上の官爵を持つ大名達、その家格に該当する大名家の隠居です。先の現存する清揚院霊廟石灯籠の奉献者名簿から言えば稲葉丹後守正通、松平伊賀守忠栄、阿部飛彈守正喬、松平右京大夫輝貞で何れも綱吉政権における老中、側用人を勤めています。松平出羽守清武も一基献納しています（緑色で示しています）。

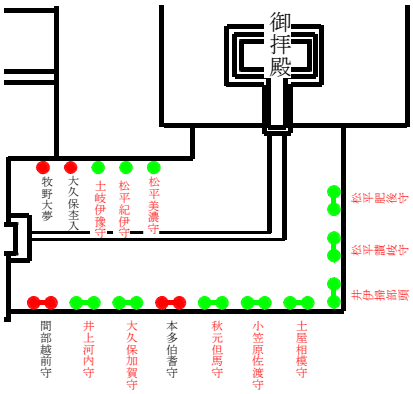

図3 常憲院奥院拝殿前拡大図

奥院拝殿前には十五名の大名が献納していますが、松平肥後守正容、松平讃岐守頼豊、井伊掃部頭直恒、土屋相模守政直、小笠原佐渡守長重、秋元但馬守喬朝、大久保加賀守忠増、井上河内守正岑、松平（柳沢）美濃守吉保、松平紀伊守信庸、土岐伊予守頼殷が該当します。（図3拡大図に赤字で示しています。）その中でも松平肥後守、松平讃岐守、井伊掃部頭は溜間定席で極官が中将の家格を持つ大名家です。

図4 五千分一東京図測量より

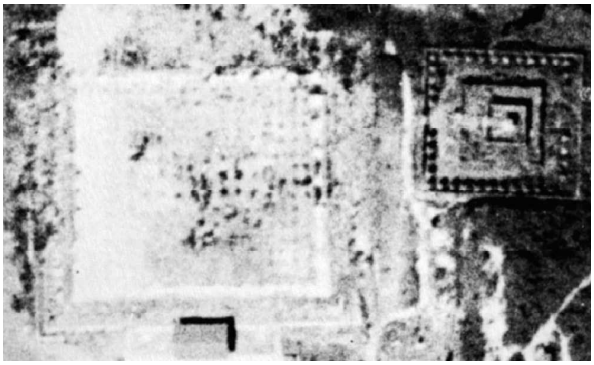
写真9　昭和22年撮影米軍航空写真

間部越前守は家宣政権での側用人ですので、綱吉との深い繋がりは有りませんが、本多伯耆守は1704年－1711年まで老中職で、桂昌院霊牌所には石燈籠を献納していますので、恐らく清揚院霊廟にも燈籠を献納していた物と思われます。

こうしてみると勅額門内に燈籠を献納する家格の大名の内、幕府の役職に有った者だけが燈籠を献納していた物と思われます。清揚院霊廟に燈籠を献納した大名のうち永井伊豆守直敬、久世大和守重之、加藤越中守明英、大久保長門守教重は従五位下で十万石以下ですので将軍霊廟ではそもそも勅額門内に燈籠を献納出来る資格はありません。久世大和守は下総関宿藩五万石ですので石燈籠二基、永井伊豆守直敬、大久保長門守教重、加藤越中守明英は五万石以下ですので石燈籠一基づつを勅額門外に献納しています。

次にどこに燈籠が配置されていたかを陸軍参謀本部測量局が作製した『五千分一東京図測量原図』で確認してみたいと思います。

清揚院霊廟内には×印で燈籠が描かれていて、拝殿前は黒色、勅額門内と奥院に赤色の燈籠位置が記されています。（地図の記号としては層塔☒となっていますが×のように見えます。）拝殿前の燈籠は他の将軍霊廟の燈籠の配置から考えても御三家の銅燈籠と思われます。同じく前田家の献納した銅燈籠は、図からは窺えませんが、過去の霊廟への配置から見て勅額門内側左右で有ったと思われます。伺候席は大廊下下之部屋、無官でも中将の上席という家格です。当時越前松平家が家格を落としていましたので、前田家は

御三家に次ぐ家格を持って居ました。今図4に緑色の丸で示しておきます。

三十四基の石燈籠のうち奥院に何基置かれて居たかは判りませんが、柳沢吉保の燈籠を含めて宝永二年銘の燈籠はこの位置にあった物と思われます。

ところで空襲で被災した増上寺の姿を写した写真があります。米軍が昭和二十二年に撮影した航空写真です。この写真の清揚院霊廟の辺りを拡大した物が写真9です。霊廟建物は既に廃棄されており、奥院の部分だけが再整備されていたことが判ります。

図4と地盤部分が大きく変わっているのは、戦時中に山内の丸山に高射砲陣地が有ったことと関連していると思われます。奥院の恐らく円墳状になっていた部分を簡単な障壁で囲ってその外側に石燈籠が綺麗に並んでいるのが判ります。その数は三十五、六基です。つまり現在残されている清揚院石燈籠とほぼ同数の燈籠がそこに有った物と思われます。幸い、エルミタージュやミラノの銅燈籠は明治の中頃に海を渡っていたので、増上寺の多くの銅燈籠が焼失した後も、在りし日の姿を伝えてくれることになりました。

2　ペンシルベニア大学の桂昌院銅燈籠

次にペンシルベニア大学の西村曜子先生からご報告を頂きました桂昌院の銅燈籠について紹介させて頂きます。西村先生によりますと、この写真の燈籠はペンシルベニア大学の博物館の中庭に設置されていて、もう一基同じ銘文の燈籠が倉庫に保管されているようです。燈籠が何時ペンシルベニア大にもたらされたかは不明ですが、西村先生に依れば「この二つの銅燈籠は第二次大戦よりも前、1930年ごろには幣館が既に所蔵していた写真（1932年）が残っております。」とのことです。

写真 10　ペンシルベニア大学銅燈籠

西村先生から頂いた燈籠の銘文写真は貴重な資料となりますのでお許しを頂いて掲載しておきます。

写真 11　下竿刻銘

写真 12 下竿刻銘

從四位下行近衛權少將兼美濃守
甲斐國主源朝臣松平吉保

御鑄工
椎名伊豫重休

写真 13 燈籠上竿

奉獻
武州增上寺
桂昌院殿尊前
銅燈臺二基
寶永二年乙酉六月廿二日

宝永二年に柳沢美濃守吉保が桂昌院霊牌所に奉献された銅燈籠に間違いは無く、柳沢家の記録である『楽只堂年録』に銘文の記載が有ることも西村先生よりご指摘を頂きました。

ご連絡を頂いた当時『楽只堂年録』の関連の部分は刊行されておらず、や

っと昨年の暮れになって『楽只堂年録　第六』(史料纂集　八木書店　平成29年12月)として刊行されたので書き抜いてみます。

宝永三年正月廿二日

一、桂昌院様の御廟所の前に、銅燈臺二基を、今日建つ、件の燈臺に彫り付たる詞、爰に記す、

奉獻

武州増上寺

桂昌院殿　尊前

銅燈臺二基　　従四位下行左近衛權少將兼美濃守

甲斐國主源朝臣松平吉保

寶永二年乙酉六月廿二日

もう一つ『楽只堂年録』には燈籠銘に関する記述があります。宝永二年十月六日の記録で、

一、今度、桂昌院様・清楊院様の、両御佛殿へ、諸臣燈臺を献するに、老中は、何の所の城主と署名するによりて、吉保か事をは、甲斐國主と記すべきやと、林大學頭信篤(鳳岡)より尋しを、自分にはいひかたし、上意を伺ひ、城主と記し然らんか、と申達し言上しぬれは、國主と記すべきよしを仰出さる、

とあり、柳沢吉保がどの様な称号で燈籠を献上するのか林大学頭信篤より問い合わせがあったのに対して、上意を伺って国主と記することのお許しを頂いたと記しています。清揚院燈籠については

十一月十一日

一、清楊院様の御佛殿の前に、石燈臺二基を、今日建つ、件の燈臺に彫り付たる詞、爰に記す、

奉獻石燈臺、兩基、

増上寺、

清楊院殿　尊前

寶永二乙酉年十月十四日

従四位下左少將兼美濃守甲斐國主

松平吉保

とあり、桂昌院の銅燈籠に刻まれたとほぼ同じ銘が書かれています。参考までに狭山山不動寺に移設されている柳沢吉保の清揚院殿奉獻燈籠の銘は

奉獻石燈臺兩基

増上寺

清揚院殿　尊前

寶永二乙酉年十月十四日

従四位下左少将兼美濃守甲斐國主

松平吉保

となっており、『楽只堂年録』の記述の正確さが判ります。

西村先生からのお尋ねは写真10に見られる銅燈籠の笠に付けられた紋の事でした。これに関しては不動寺に移された桂昌院宝塔に付けられていた紋が実は「輪宝」模様であり、『鈴木修理日記』により、葵紋が取り外されて付け替えられていたことは、前にご紹介させて頂きました。(『増上寺徳川霊廟の風景(10)』)

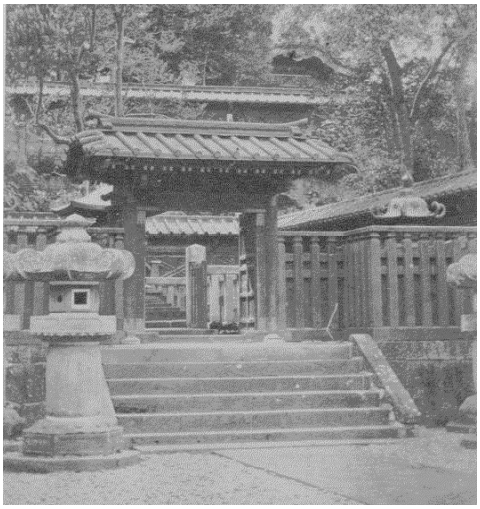

写真 14 桂昌院墓所

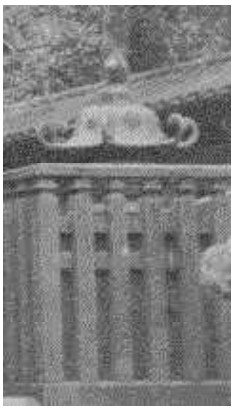

写真 15　写真 14 拡大

また、『幕末明治期写真資料目録Ⅰ』に収載されている写真から墓所のどの位置に柳沢吉保の銅燈籠が建てられていたかも明確になりました。

次にそもそもどの様な身分の人間が燈籠を奉献したのか？その全体像について考察してみたいと思います。

桂昌院の霊牌所には十八名の大名と一名の旗本から合計三十基の燈籠が献納されたと思われます。私の調査で二十五基の完型の燈籠と三基の火袋に代用された竿の部分が確認されています。竿の銘には献納された燈籠の基数が刻まれていますので、その合計から少なくとも三十基の燈籠が献納されたこ

とが判ります。

牧野周防守康重　一基　本庄宗資の五男　牧野家養子
松平豊後守資俊　一基　本庄宗資の二男　浜松藩主
本庄宮内少輔道章　一基　本庄道芳の孫　初代岩瀧藩主
松平内膳正宗長　一基　本庄資俊の二男　初代高森藩主
富田甲斐守知郷　一基　本庄宗資の四男　中奥の御小姓から寄合七千石
大久保隠岐守忠増　両基（老中 1705 年－1713 年）
土屋相模守政直　両基（老中 1687 年－ 1718 年）
稲葉丹後守正通（正往）　両基（老中 1701 年－ 1707 年）
秋元但馬守喬朝（喬知）　両基（老中 1699 年－ 1707 年）
本多伯耆守正永　両基（老中 1704 年－ 1711 年）
小笠原佐渡守長重　両基（老中 1697 年－ 1705 年）
松平右京大夫輝貞　両基（側用人 1694 年－1709 年）
松平伊賀守（忠栄）忠周　両基（側用人 1705 年－ 1709 年）
松平遠江守忠喬　両基　桂昌院仏殿造営奉行
井上河内守正岑　基数不明（老中 1705 年 － 1722 年）
黒田豊前守直邦　一基　綱吉の御小姓　日立下館藩　神田館家臣より
稲垣對馬守重富　一基（若年寄 1699 年 －1709 年）
永井伊豆守直敬　一基（若年寄　1704 年　－1711 年）
久世大和守重之　一基（若年寄 1705 年－1713 年）

図 5　五千分一東京図測量原図より

です。勿論銅燈籠は有りません。

本庄の家の者が五名、いずれも一基づつ燈籠を奉献しており後は幕府の役職者です。七千石の寄合、富田甲斐守知郷が墓前に石燈籠を奉献しているのは本庄一族の一人とは言えやはり異例のことに思われます。

ではこれらの燈籠はどの様に霊牌所に配置されていたのでしょうか？再び明治十七に陸軍参謀本部測量局が作製した『五千分一東京図測量原図』で位置を確認してみたいと思います。

図 5 は桂昌院霊牌所の部分を拡大して表示しています。赤い丸で囲んだ部分が桂昌院の墓所で、墓所の前左右に燈籠を示す×印が描かれています。この左右の×印が柳沢吉保の銅燈籠の位置を示していると思われます。三十基余の石燈籠は拝殿前の×印として表されていると思いますが、勿論全てを表示しているわけではありません。

写真 14 は戦前の絵葉書に映し出された桂昌院墓所の解体前の写真ですが、墓所の前に石燈籠が左右に並んでいるのが見られます。勿論この時期には銅燈籠は撤去されています。従ってこの石燈籠の配置が、桂昌院霊牌所建物の撤去・競売後の霊廟域の整備により動かされた物であるかどうかは判りません。

The Grave yard of Keishoin (5th Shogun's Mother)　（桂昌院御樓代五）廟御樓跡昌桂

写真 14　桂昌院墓所（戦前）

写真 15　ペンシルベニア大銅燈籠笠

写真 16 ペンシルベニア大銅燈籠中台

さてここで私たちは、もう一度桂昌院宝塔に付けられていた葵のご紋の撤去、輪宝模様への付け替えについて考えなくては成りません。

ペンシルベニア大学の西村先生からご提供頂いた写真に見られる

ように笠と中台には輪宝があしらわれています。恐らく宝塔の葵紋が取り払われたと同時に、輪宝に変えられた物と思われます。残念ながらその経緯を『楽只堂年録』は記載していません。では石燈籠はどうなっているのでしょうか？私が確認した石燈籠の内、完型で残されているのは二十五基ですが、その内葵紋を付けているのが十三基、紋の無いのが十二基でした。実は今回この項を書くに当たり近くにある桂昌院の石燈籠を調べ直してみたのですが、清瀬市にある円福寺で有る事に気づきました。円福寺には桂昌院二基、文昭院一基、有章院一基が移築されていますが、桂昌院燈籠の二基の内一基が無紋、一基が葵紋の笠を付けています。ところが同時に移築された有章院の笠が無紋なのです。この時期将軍家霊廟に献納された燈籠の笠が無紋であることは考えられません。つまり、増上寺から一時的に移され保管されていた下山口の西武球場敷地から運び出され、円福寺で組み直されたときに笠が入れ替わってしまったのです。

西武球場と道路を隔てて反対側にある狭山山不動寺には十一基の桂昌院燈籠が納められていますが内九基が無紋、二基が葵紋なのも、移築の際に取り違いが起こりにくかったからだと考えられます。恐らく桂昌院に奉献された石燈籠にも葵紋は付けられていなかった物と思われます。

もう一つ『増上寺徳川家霊廟の風景(10)』で保留にしていた燈籠の高さについて考察してみます。稲垣對馬守から曲淵越前守への指示をもう一度書き抜いておきます。

十月廿六日　丙辰　晴、曇

曲淵越前守殿ゟ御手紙。

御石灯籠之義、対馬守殿江相伺候へば、如此付紙被成被遣候間、高サ五六寸ほどひきく、惣体五六分程石たゝきちゞめ候様ニ御申付可有之候、尤恰(好)能、相違間違無之様被申付、大帳ニも右之旨御留置可有之候、以上。

十月廿六日　曲淵越前守

鈴木修理様

付紙

五六寸ひきく可仕候。

御石灯籠之義、清揚院様御石灯籠ゟ五寸程ひきく可仕と奉存候間、御内意奉伺候、以上。

十月廿四日　曲淵越前守

先にも書きましたが増上寺の清揚院霊廟へ奉獻された石燈籠は、宝永二年に傳通院から遷座した際の燈籠と、三十三回忌に当たる宝永七年の燈籠と二種類有ります。

まずは桂昌院と清揚院の石燈籠が共に移設されている狭山山不動寺の燈籠で燈籠の高さを数字で比較してみます。

不動寺には清揚院の燈籠が二十九基有りますがその内宝永二年のものは九基です。桂昌院の燈籠は十一基になります。

高さについては所沢市教育委員会が平成十五年に刊行した『所沢市石造物調査報告書4』「山口・吾妻の石造物」に記載が有りますのでその数字を摘記してみます。

この比較方法が統計的に正しいかは別として、総体で約三cm位の差が出ましたから約一寸ほど小さいと言うことが出来ます。但し前に書きましたように、増上寺から運び出された時には、石燈籠は一度解体され、西武球場の敷地で再び組み上げられましたが、部材ごとに積み上げられたり、乱雑に放置された物も有りました。燈籠を譲り受けて搬出する際にも、笠や火袋は出来るだけ破損のないものを選んで積み出したという証言が有りますので、現在の燈籠の部材の組み合わせは増上寺での解体の際の状況を正しく反映しているとは言えません。そのことを考慮して、あくまで参考として示しておきます。ただ、私が不動寺の清揚院と桂昌院の燈籠の棹の部分を計測してみたところ、約二cm程桂昌院のものが小さいので、稲垣對馬守からの指示を受けて、棹の部分を多少削ったのかもしれません。写真17に清瀬市の円福寺にある桂

清揚院

	寄進大名姓名	寸法
山口36-64	松平美濃守吉保	284×124
山口36-65	松平美濃守吉保	286×126
山口36-63	稲葉丹後守正住	286×126
山口36-59	阿部飛彈守正喬	286×124
山口36-60	阿部飛彈守正喬	284×122
山口36-5	松平右京大夫輝貞	284×125
山口36-8	松平右京大夫輝貞	287×126
山口36-47	松平伊賀守忠周	286×124
山口36-49	松平伊賀守忠周	286×126

平均高さ=285.4

桂昌院

山口36-2	稲葉丹後守正住	280×126
山口36-27	稲葉丹後守正住	286×124
山口36-3	松平右京大夫輝貞	282×126
山口36-28	松平右京大夫輝貞	284×125
山口36-24	秋元但馬守喬知	284×124
山口36-25	秋元但馬守喬知	286×126
山口36-4	松平伊賀守忠周	281×126
山口36-14	松平遠江守忠喬	280×124
山口36-23	松平遠江守忠喬	284×126
山口36-26	本多伯耆守正永	284×124
山口36-42	土屋相模守政直	278×140

平均高さ=282.6

昌院燈籠を載せてお
きます。一族である
本庄宮内少輔道章が
奉献したものです。
この燈籠の形がかな
り正確に原型を留め
ていると思われます。

写真 17　桂昌院燈籠（円福寺）

ミラノの今井めぐみ様から最初にお手紙を頂いたのが 2015 年の 9 月、ペンシルベニア大の西村曜子先生から頂いたのが 2016 年の 10 月のことです。随分時間が経ってしまいましたが、清揚院、桂昌院については燈籠だけで無く色々な事を学び皆様にご報告が出来ることになりました。連載の回数も 4 回にわたりました。長い連載に辛抱強くお付き合い頂いた皆様に感謝しております。今回も難波謙一氏が全体に細かく目を通して頂き、誤りや判りにくい箇所を指摘して頂きました。

今井様、西村先生にとってこの報告が十分に満足頂ける結果になったのか判りませんが、貴重な写真や資料をお送り頂き報告の機会を頂けたことを感謝しております。

尚、西村先生はペンシルベニア大の銅燈籠について論文を発表されるとのことですので、期待しております。

（2018.6.28）